参考資料４　いわき市の対応（日本水道新聞掲載記事転載）

日本水道新聞
平成24年5月17日
～6月18日

（1）　第4883号　（購読料1部360円1カ月2,450円 1年　29,400円　消費税含む）　（昭和29年2月9日第三種郵便物認可）

311水道部隊の軌跡 ②

"想定外"の言葉に重み
苦情・問い合わせが殺到

（5月17日付1面から）

●復旧開始

無線から交信が聞こえてくる。他の課所では作業が続いていた。2時間ほど経過し、所内の静けさが破られた。「山玉より勿来事務所どうぞ」との交信が入る。

「はい、勿来どうぞ」「山玉ですが、法田の濁度が下がりましたので、間もなく送水開始します。配水池で調整お願いします」「勿来了解しました。今から向かいます」。

勿来全域が被災し、ほぼ全戸が断水。まさにゼロからのスタートとなった。2班4人の職員が配水池に向かった。

上原は残った職員を集め、今後の作業を検討した。「まず、法田配水池に水を貯めて、配水しながら高倉配水池に貯めるのを、とりあえずの目標でどうだろう」。上原が会議を始めると、「水を出すと結構漏水していると思うんですよ。それを修理しながら給水エリアを広げていくしかないですね」。鈴木次長が自分の考えを言うと、「漏水全部直してたんでは進みませんよ」と技術員の木村が指摘した。

「とりあえず、漏水カ所はバルブで仕切って、修理が終わるまでは断水を継続しながら先に水を配っていかないと進まないんじゃないの。それでやってはどうだい」と上原が提案した。

広域断水の場合、幹線に連なる枝管をまず仕切って、幹線に異常が無ければ、枝管のバルブを1カ所ごと開けながら、漏水を確認してエリアを広げていくのがセオリーである。しかし、上原の提案は一つのエリアに一気に配水し、事後に漏水している路線を断水しようとするものであった。漏水が多くの枝管で発生していれば、かえって復旧が遅くなる危険性はあったが、少しでも給水エリアを広げるためにはこれしかないと、所内の意見は一致した。

●応急給水

災害用に水道局が備えていたのは、飲み水を確保するための市内21カ所の非常用地下貯水槽、3台の給水車と、トラックに積む25個の給水タンク、自動給水分配装置などであった。今、市内に給水している全域13万戸、33万人が断水し、勿来では2万戸、5万人が水道を使えない状況にあった。

全域断水になり、上原がなすべきことは、生活に必要な最低限の水を届けるための応急給水と、漏水カ所を修理しながら給水可能な区域を広げることであった。水道局の総力を挙げ、何としても生活用水を確保しなければならなかった。

まず、手動ポンプで水を汲み上げる非常用地下貯水槽を開設する。そして、市内全域に給水拠点を設け、管工事組合に応援を求めて給水活動をするよう準備することであった。さらに、自衛隊にも給水活動の応援を求めた。

この時点では、日本水道協会から派遣された他都市の給水車が、3日以内には応援に来てくれると水道局では考えていた。それまで何とか堪え忍べればと。

12日早朝。勿来でも4カ所の地下貯水槽を開設するための作業を行った。そして、応急給水。まずは17カ所の避難所、病院であった。そして、学校、公民館4カ所の拠点給水には風船式貯水槽を設けて民間の応援をもらい、3台の給水車で巡回を開始した。

電話回線が繋がり始めると、市民からの問い合わせや苦情の電話が殺到した。

「いつ水道が出るの」「何で勝手に水道止めるの」「どこに行けば給水もらえるの」と5台の電話が鳴り続ける。所内12名の職員のうち8名は現場に出て、残った4名で電話を受けた。次から次と電話は鳴り止まない。

「住所はどこですか」と市民に問いながら、「できるだけ早く水が出るよう作業してますのでお待ちください。給水車は錦中学校に行きますので、そちらで水をもらってください」と、給水の見込みや給水所の場所を知らせた。

●想定外

市内には、平、山玉、泉、上野原の4浄水場があり、おのおのの水系に配水されている。毎年、水道局では災害訓練を行っていた。その中での想定は、市内の半分が断水になった場合であった。しかし、未曽有の大震災に見舞われ、市内全域で断水となってみると、それは想定外であった。上原は、これまで技術者として蓄積してきた災害に対する知識が根本から崩れていくのを感じていた。

河川が氾濫した場合、「想定外の雨が降ったことにより、河川堤防が決壊した」と管理者が説明する。「河川の断面計画は、それまでの経験値で、50年、100年に一度の確率で設計されてきた。最近の降雨は、地球温暖化の影響でこれまで経験のない雨量を観測している。そのため、想定外の被害をもたらす」というように、一時期に一地方での自然災害については、この常套句「想定外」で苦しい説明をしてきた。

今、大震災により東北から関東まで広範囲の被災が報道され、さらには、巨大津波で東北沿岸は壊滅的な惨状である。今回、未曽有の大震災を「想定外」という説明で語るのはとても無責任で、軽々にはその言葉を使うべきではないと上原は思った。

今日からの応急給水について、上原が支所長に報告に行くと、「昔、勿来の関は今より海の方にあったけど、津波で削られて山側の現在の位置に移動したという説もあるから、この大震災と大津波は平安以来の千年に一度の大規模な災害ってことだな」と言われ、これほどの大災害が過去にも実在したことを知った。

これからの技術者には、千年に1度の災害を想定した防災対策が求められてくることを考えると、「想定外」の言葉の重みを上原は改めて強く感じた。

津波で被災した岩間地区の仮設給水所

金成　恭一
いわき市水道局参事・給水課長

311水道部隊の軌跡 ③

（5月21日付1面から）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

●給水拡大

早朝から貯水していた法田配水池が、昼前には配水可能な水位になった。「4号より勿来、応答願います」と無線が入ってきた。

「はい、勿来です。どうぞ」と上原が出ると、「法田配水池ですが、これから流出バルブを徐々に開けていきます」と現場から作業開始を告げてきた。「勿来了解しました。よろしくお願いします」と、感情を高ぶらせながら上原が応答した。

断水を解消する給水拡大の戦いが始まった。一定の地域で空っぽになった配水管に水を満たしながら給水し、道路上や宅地内で漏水がないかを確認していく作業である。その際、漏水があれば最小区域を断水し修理しなければならない。

3日目の3月13日までに、次の池である高倉配水池までの区域が給水拡大された。一方、山玉浄水場からの送水管の漏水は、突貫工事を行い、14日には勿来配水池の貯水が開始された。そして、15日には勿来地区の約3割の川部、窪田、関田地区の給水が可能となった。

●原発事故

必死に給水拡大の作業を進めていた事務所に、原発事故という驚愕のニュースが飛び込んできた。震災の大津波で破壊された福島第1原子力発電所で、13日と14日に2度の水素爆発が起こり、放射能が空中に飛び散った。

余震が、ドン、グラグラと、繰り返し発生している不安の生活に、さらなる追い打ちをかけた原発事故。30キロ圏内が一部あるいわき市でも、南部にある勿来は60キロ離れている。とは言っても、事故発生直後は、感宅に避難させる職員もいたが、多くの職員は、放射能の不安より、この大断水を解消するという使命感が勝っていた。しかし、漏水修理を行う業者の中にも、いわき市から避難する者が出てきた。

さらに、雨が降り出せば、放射能が含まれるとして、外に出ない、肌を濡らさなどこにどのくらい放射能があるかという重要な情報は入らない。さらに、原発が最悪の事態にならない保証はどこにも無かった。

若い職員に動揺が走る。仕事が手につかず、現場作業で外に出るにはそれなりの覚悟を要し、体調不良を訴えた。子供だけでも親

放射能不安の中で作業

物流もストップ まさに四重苦

金成 恭一
いわき市水道局 参事・給水課長

った。今回、他所からの職員応援は無く、当初期待していた他事業体からの給水応援は、放射能の不安から派遣予定が中止されていた。さらに、一刻も早く漏水修理を進めたかったが、それを工事する業者も避難して、勿来には2社だけが残るのみであった。上原は、限界だと気が萎えた。

いよう自己防衛する市民、職員が多くなった。管工事組合でも、「給水活動中に雨が降り出したら中止する」「明日、天気が雨ならば工事は中止する」との申し合わせができていた。その中で応急給水を行い、給水拡大するために、職員は黙々と作業を続けていた。

上原はこれまで仕事上、「能力的にできない」という限界を感じたことはなか

今、日本一多く陽の光が降り注いだ白砂青松の海岸線は、大津波で見るも無残な姿をさらし続けている。日本の中でも住みよい町として定住した人も大勢いる。この誇るべき郷土復興のため、俺たちが頑張って少しでも早く水を出すことが、今一番必要だと上原は思い直し、右手を強く握り締めた。

震災発生から2日間、全員が不眠不休で作業に当たったが、多発した漏水を断水修理する作業は、遅々として進まなかった。今できることは、一人ひとりの気力体力が続く限り、作業を行うことだけだった。

放射能の不安の中での作業である。「ヨードチンキを数滴水にたらして飲むと放射能には効くよ」と上原は職員に飲むことを勧めた

津波で被災した蛭田川水管橋（φ200）

が、数日後にそれが間違いで、逆におなかを壊すことがわかり、冷や汗をかいた。

「外で雨が降り出したら、作業を中止してください」と上原は職員に注意を呼びかけた。

●風評被害

原発事故により、いわき市民は地震、津波による被災と放射能への不安との戦いを強いられることとなった。さらに、いわき市に入るのは危険だという風評により、さまざまな人と物の流通がストップした。まさに、四重苦。市民は極限の耐乏生活の中で生きなければならなくなった。

水道では、3月13、14日に応援に来る予定だった日本水道協会の給水車が来ない。注文した修理資材が水戸まで来たが、いわきまで運んでくれない。仕方なく、業者が資材を受け取りに行かなければならなかった。

市民生活では、ガソリンのタンク車が郡山から来なくなり、ガソリンスタンドでは在庫が底をつき始めた。スーパー、コンビニの商品も品薄状態に陥り、地震で損壊がひどいこともあって店を閉める店舗が多くなった。

生きていくためには、給水所に行く車の燃料を心配しながら、水を確保するために何時間も並ぶ。ガソリンでもスタンドに並ぶ。開いているスーパーに入るのにも並ぶ。そんな生活が3月下旬まで続いた。

この厳しい状況の中で、郡山からガソリンタンク車を運転してきたのも、病院などに給水してくれたのも自衛隊員であった。そして、がれきを動かし、遺体捜索を行ってくれた。

311水道部隊の軌跡 ④

（5月28日付1面から）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

●遺体確認

地震発生から4日後に、がれきの中での警察、消防の捜索が始まることを聞いた鈴木次長は、その日、休んで捜索を見守ることにした。水道復旧という使命感に、それまで働き続けた鈴木が初めて取った休暇であった。その日に2人の遺体が見つけ出され、安置所の警察署に運ばれた。

夕方、職場に警察署から電話がかかってきた。「行方不明だったお母さんと思われるご遺体が見つかったので確認していただきたいのですが、鈴木さんと連絡が取れないので何とか連絡できませんか」とのことであった。上原は、すぐに鈴木の寄寓先に連絡を入れたが不在であった。連絡をくれるよう依頼して電話を切った。

鈴木と連絡が取れたのは1時間後であった。流出した家財を求め、がれきの中を探していたのだという。これから警察署に向かうと鈴木は伝えてきた。

鈴木から母親の確認を知らせてきたのは、さらに2時間が経過した頃だった。話すその声は、涙で聞き取りにくかった。早い時期に遺体が見つかったことが鈴木にはせめてもの救いであった。2日後に、母親は火葬され遺骨となった。しかし、大津波で先祖の墓が失われた鈴木の家では、埋葬する安住の場所は無かった。当面、遺骨は葬祭場で預かることになった。

●食事確保

震災から2日目に着替えを取りに戻った上原が「コンビニも弁当屋もやってなくて夕ご飯、何とかしないと」。妻の真美に相談すると、「おにぎりでよかったら、水出てる友達の家からもらってきてご飯炊くけど」と申し出てくれた。「悪いけど、そうしてくれると助かるよ」と真美に言った。状況が好転しなければ、しばらくは真美にお願いするしかないと上原は思った。

それとともに、水道局でも炊き出しが始まった。勿来にも配給されたが、食材の確保が厳しくなると各課所で食事を工面することとなった。断水している中でも営業している弁当屋を探して注文したり、友人におにぎりや味噌汁を作ってもらったり、真美にも差し入れてもらったりして、何とか食事を確保した。

現場に出て作業する職員には休憩も食事時間も無かった。そんな彼らに食事の心配をさせたくなかった。上原は食事が不足しないよう気を配るのも仕事になっていた。

●飲水不安

原発事故で水道水への影響が懸念されていた矢先に、東京の金町浄水場から指標値を超える放射性ヨウ素が3月23日に検出され、「乳児の水道水飲用を控え

各支所でボトル水配布

水道水から放射性ヨウ素

て」と広報する事態が生じた。

放射性ヨウ素に関しては、長期にわたり摂取した場合の健康影響を考慮して、厚生労働省が「食品衛生法に基づく暫定的な指標値」として設定しており、「1㎏当たり300Bq、乳児では100Bqを超えるとき飲用に供さない」としていた。

続々と関東地方にこの事態が広がり、いわき市でも乳児の指標値を超える放射性ヨウ素が検出され、乳児の飲用を控えるよう広報して、各支所などでペットボトル水を配布することとなった。ボトル水は支援物資として大量に送られてきており、市民ボランティアにより配られた。

そんな中、事務所にも多くの問い合わせがきた。「乳児は何歳までか」「どういう理由で水が飲めないのか」「規制の基準はどんな根拠があるか」というような質問に、「乳児は1歳未満」「長く飲んだ場合の健康への影響」「詳しいことは県の食品生活衛生課に」というように答えるのだが、職員も初めてのことで戸惑うばかりであった。

26日の夜8時頃、先ほどまで電話で話していた市民が事務所に怒鳴り込んできた。「乳児を5歳までと言った職員のお陰で、水道を使わずボトル水で料理してきたんだよ。何で正確に言わねんだ」と抗議する。

「そんなこと言わないと思いますよ。基準は1歳未満ですから」と説明しても、「そう言ったから、5歳の子供なのにボトル水を使ったんだよ。いい加減なこと言うなよ」と、何度も同じ会話が繰り返され、次第に声高になり激高してきた。言葉の暴力、器物も損壊しかねない状況となり、上原は下の階に詰めている警察官に立会いを要請した。

「一緒に話を聞いていてもらうだけでいいですから、立ち会ってもらえますか」とお願いすると、「こういう時のためにいますから、行きます」と快く応じ、事務所まで来てくれた。少し離れて警察官に座ってもらい、上原が市民と対峙した。

「もし乳児が5歳までと職員が言ったならば、申し訳ありませんでした」と謝り、「対象が1歳未満の乳児で、水道水は飲ませずにボトル水を飲ませてくださいという、国からの指示があります」と説明すると、市民は立ち上がりながら、「間違えんなよな。お陰でボトル水使ったじゃないか。気を付けてもらわないと困るんだよ」と言うと帰って行った。警察官にお礼を言い戻ってもらった。

いわき市での放射性物質は、3月16日から4月3日まで検出された。放射性ヨウ素が乳児の指標値を超えたのは、3月21日から25日までであった。その後は検出されず、電話での問い合わせは次第に少なくなっていった。

金成 恭一
いわき市水道局 参事・給水課長

311水道部隊の軌跡 ⑤

市民のメールで元気を

応援部隊が到着 勇気をもらった

金成 恭一
いわき市水道局 参事・給水課長

（5月31日付1面から）

●応援部隊

原発の風評で応援を見合わせていた日本水道協会が応援に来たのは21日であった。給水活動に、坂戸市をはじめとして横浜市、東京都の関東支部が駆けつけた。それまでいわき市民は、日本から見捨てられた棄民ときえ感じていた。この応援により、市民が奮い立ち、再興への道を歩み始められると上原は喜んだ。4月末まで続いた給水応援は、35団体の給水車46台、職員等125人に及んだ。

勿来では、その頃までに約半数の地域の給水を可能としていた。

応急給水は3台の給水車がフル回転していたが、透析のある病院などには、自衛隊や日本水道協会の応援部隊が給水することもあった。事務所には多くの苦言や要望が寄せられたが、上原たちは一つひとつに対応しながら、何とかその日一日を乗り切った。

この頃から、若い職員の健康不安は解消に向かい、避難した業者も戻って来た。給水区域を拡大すると、それに応じて漏水カ所が数多く発見され、その修理が追いつかない中で、さらに給水拡大するという破天荒な作業が続いていた。当然、業者の修理能力には限界があり、拡大の速度は鈍化していった。

そんな時期に、横浜市、東京都から漏水修理のための応援部隊が26日に到着すると、翌日から修繕工事が開始された。初日は要領が悪く効率は上がらなかったが、2日目以降は予定した工事量や時間を超えて、順調に復旧作業が展開されていった。遅々として進まない状況が打破され、上原は、「どこからも応援が来なくて、意気消沈してましたが、来てもらって修理の速度が上がり、本当に勇気をもらいました」と応援部隊に感謝した。

勿来には、31日まで滞在し、総件数51件の修理が行われた。応援部隊が帰る日、上原は、「これで、勿来の復旧は半月速まりました。お世話さまでした。このご恩は一生忘れません」とお礼を言った。

この時期、市全体の給水は約6割、勿来は約9割まで復旧していた。

●市民との対話

震災以来、市民からの苦情、要望や漏水情報には、所内の職員だけでは対応しきれなかった。「いつまでに水が出るの」とか「いつ給水管の漏水を修理するの」の質問に、「不眠不休で一生懸命やってますので、できるだけ早く出します」「業者が目一杯で、見つけた順に修理やりますから」と回答しても納得せず、同じ質問を何度も繰り返す市民。そういった電話応対が続く。上原は電話のベルに恐怖を感じるようになった。しかし、部屋にいる職員の誰かが電話を受けなければ、電話の呼び鈴は鳴り続ける。次第に上原の電話を受ける声も小さくなった。

ときには信じられない電話もあった。「私の家の漏水いつ直りますか。近所は水が出てるんですが」との問い合わせに、「順番で修理してますから、待ってください。それまでご近所から水をもらってください」と答えると、「水道局で隣に頼んでもらえますか」という市民がいたり、別の市民は「区長さんに頼んでもらえますか」と言った。日頃の近所との付き合い方までわかることもあった。上原はあきれるばかりで、さらにストレスが溜まった。やっとのことで平常心が保たれていた。

事務所で電話や来客の市民と接する職員のストレスも溜まる一方だった。所長の上原が冷静に淡々と業務を処理し指示することで、職場を平静に保とうと努めていた。部屋に持ち込んだ弓を素引きし、呼吸を整えることが、上原の唯一の精神安定剤であった。

震災後5日目になって、他の部局職員の応援が来て電話応対に当たった。それで、やっと漏水カ所の整理や修理依頼などの内部事務ができるようになった。

市民からは、電話のほか電子メールの問合せが多く寄せられた。電子メールは正確性とともに迅速な回答が求められた。必然的に、全体を把握している所長の上原が回答することが多かった。電話と同じように、水が出る予定、修理の時期や叱責のメールが大半であったが、お礼や賞賛のメールも寄せられ、それを印刷し壁に貼り、職員にも見てもらい感動を分けあった。

「家族には小さな子供もいて、衛生的にもすごく心配していてもう駄目だと思いました。希望が見えてきました」

「昼夜対応いただき、本当にありがとうございました。この広い、いわき市の災害復旧を考えるとスピーディであったと考えます」

「工事予定のPDFのアップや出ている地域のアップで、不安材料が大幅に減りました。まだまだ大変でしょうけれど、どうか頑張ってください」

「本日工事終了し水が出ました。これで介護老人の洗濯物が処理できます」

「公務員の皆さまが災害からいわきを見捨てることなく、日夜頑張っていただいております。感謝しています。いわき市職員の素晴らしさを誇りに思います」

こういったメールが届くと、上原は頑張ろうと奮い立つのであった。メールを見た他の職員も元気が出たようだった。

311水道部隊の軌跡 ⑥

（6月4日付1面から）

最初からやり直しだ

4・11余震 配水池が空の状態に

金成 恭一
いわき市水道局 参事・給水課長

●余震前日

上原が、仙台の勇樹と連絡が取れたのは、震災から4日後だった。サークルの大会で岐阜県にいるのがわかると、上原は安堵感ですーっと力が抜けるのを感じた。

勇樹は半月ほど東京の兄の所に居候した後、4月初めにいわきに帰って来た。「災害の状況もわかるし、どうせ学校休みだろう。ボランティアやってみるか」と上原が勧めると、「何にもできないけど、いい経験だからやってみるよ」とその気になった。そして、1週間、給水活動や支援物資の配給を手伝った。次世代を担う彼らには、この大災害を心に刻み付け、故郷を襲った悲劇を伝えてもらいたいと上原は願うのだった。

浄水場から開始された水道復旧は、順次区域を広げ、4月初めには海岸に近づいていた。その海岸は、押し流された民家のがれきが道路まで埋め尽くされ、至る所に壊れた車が放置されている。その中で、家の中を片付けたり、家財を探し求める住民の姿があった。残念なことに、住民を装った盗難が多く発生していた。

風評被害が広がる中、市民の不安を払拭するためには、真っ先にライフラインを復旧することであった。電気と水道が使えれば、一時避難した市民も戻って来ていた。生活必需品は、一時の物資不足が解消し、支援物資には余剰が生じていた。

各家庭の給水管が津波で剥ぎ取られた海岸の町に、いかに水を届けるか。これが上原の課題であった。「今仕事しないで、いつやるんだ」との強い使命感が上原の心身を鞭打っていた。事務所の職員も疲れ切っていた。上原は、職員全員を交代で休ませ、リフレッシュしてもらうことにした。

4月10日。雨で業者は工事を中止した。待機の必要が無くなり、上原は、久しぶりに家で夕飯を食べた。あと2、3日で幹線管路の応急復旧が完了する。ただ、勿来で発生した漏水は350カ所。修理は追いつかず、約半数が修理できずに断水を継続していた。

●最大余震

4月11日。3月11日の大震災から1カ月が経過した。発生時刻の14時46分には、市内全域で被災者に黙祷が捧げられた。事務所にいた上原と残っている職員も、起立して黙祷した。

夕方5時近くになると、事務所には漏水修理が早く終わり、全員が戻っていた。「早いね。もう1カ月だ。最初3カ月って言われてたけど、結構早く復旧できてよかったね」と上原が言うと、「今日は早く帰れそうだから、家で夕飯食べて、風呂に入ろうかな。でも、その後、パタンキューなんだよな」と技術員の木村が笑いながら言った。水系の末端にある木村の家では、1週間前にやっと水が出ていた。断水中、木村の帰宅は深夜であったが、高校生の娘のために毎日ポリバケツに生活用水を汲んで帰った。他の職員も家を省みる時間は無く、日々奮闘の中、水を届けるのが精一杯であった。

外では雷鳴がとどろき、激しく雨が降っていた。終了のチャイムが鳴り、帰り支度を始めようとした時だった。17時16分。地響きとともに事務所が突き上げられ、激しく左右に揺れ始めた。机上の書類は散乱し、引き出しが飛び出し、棚や机、イスがぶつかり合いながら動く。

いわき市南部を震源とする震度6弱の地震だった。3月11日以降の余震は11回、震度4の強い揺れも8回あった。地震慣れしていたこともあったが、大きな揺れにもかかわらず、職員の動揺は少なかった。

3月11日の地震でズタズタになった水道管路を復旧して、市内全域にもう少しで水が届いたのに、天は上原たちにさらなる苦難と試練を落としてくれた。「また最初からやり直しだ。やだなあ」と1人の職員がつぶやいた。皆同じ気持ちだった。

雷雨は激しく降り続いていた。液状化により支所敷地内のあちこちから砂が流れ出していた。地震の激しい揺れとともに停電になった。外はまだ明るさが残っていたが、発電機を持ち込み、事務所に工事用ライトを点け、テレビで情報収集を始めた。2時間が経過した頃、上原は頼りの無線機の蓄電器が2時間だったことを思い出し、別の発電機を稼働させた。「これで、油無くなるまで事務所は大丈夫」と上原はつぶやいた。

停電により浄水場の浄水能力は奪われ、配水池への送水も不可能となった。3班で施設点検を行ってはみたものの、再び多くの力所で漏水が発見された。配水池の水位を保つため配水を絞ろうとしたが、漏水が多すぎて多くの配水池は空の状態になった。停電のために、勿来では前回よりマイナスのスタートだ。そして、市内全域が再び断水になっていると上原は思った。

施設の点検を終えた職員が、事務所に戻って来たのは午前2時頃だった。雨の中の作業で、皆疲れ切っていた。とりあえず、事務所の中で各自仮眠しながら通電を待った。

4・11の井戸沢断層で隆起した県道

311水道部隊の軌跡 ⑦

（6月7日付1面から）

●再復旧

地獄に落ちた亡者たちがいる奈落の底の、さらに深く暗い世界で、俺たちは小さく蹲っているようだと上原は思った。全員が意気消沈しながら、浄水場の再始動の時を待った。やっと、朝7時に復電した。8時間もの停電であった。

浄水場が稼働し、勿来配水池に送水が開始された。前回、幹線復旧に時間を費やした経験から、勿来配水池から小名浜までの幹線管路に通水を試みた。幸い大きな漏水は無く、空気弁からの漏水で一つの幹線ルートは使えなかったものの、別ルートから小名浜への送水が可能となった。

次に、勿来管内の法田ポンプ場水系を拡大し、高倉配水池への貯水を開始した。満水を待ちきれずに配水池から配水していった。

また、応急給水では、幸いにも他都市の給水車や自衛隊の活動が前日まで続いていたお陰で、引き続き市内全域で応急給水の作業が展開できた。

翌日から順次、給水区域を広げ始めようとした矢先だった。4月12日、14時7分。またしても、事務所が激しく大きく揺れた。2日連続の震度6弱の地震だった。11日の地震で井戸沢断層が約7㎞にわたり約1・2㍍の地表のズレを生じたことが後で確認されたが、その余震であった。

11,12日の二度の地震で、前回に増して多数の漏水が発生していた。さらに悪いことに、減圧調整の役割を担う大高調整池の内部が地震で大きく壊れ使用不能となり、錦、関田地区の約5000戸に給水拡大ができない状況となってしまった。

4月16日になり、大高調整池を経由せずに、水圧が高いまま配水できないかを検討することになった。「水圧が上がると、老朽管が何カ所か破損するかもしれないな」と木村が心配した。

「しかし、錦、関田地区に他の水系を拡大しようとしたけど無理だったんだから、当面、この方法を試すしかないんじゃないですか」と鈴木次長が言った。

「俺も、これで給水するしかないと思うな。どうだい、老朽管が何カ所か抜ける覚悟で高圧を入れてみようよ。みんなどうだい」と上原が諮ると、全員が覚悟を決め同意した。

4月16日、大高調整池を経由せずに、水圧が

津波地区に臨時給水所

調整池が損壊 昼夜分かたず作業

金成 恭一
いわき市水道局
参事・給水課長

老朽管に漏水は発生しなかった。

水道局の職員と比較的被害の少なかった北部業者の応援をもらいながら、遮二無二、昼夜を分かたず給水拡大、修繕を進めて断水解消に努めていった。その結果、4月20日には、津波等の被害が多い地区を除いた水道復旧が達成された。しかし、津波の被災地区と、液状化や道路崩落した箇所への給水復旧が残っていた。

●津波地区へ給水

底から突き上げてくる直下型の余震が断続的に続く。ドカーンの破裂音とともに、浮き上がった空間が、一気に井戸沢断層の底深くに落とされてしまいそうだと、上原は不安だった。

錦、関田地区の水圧を上げては鬼に崩される地獄の風景が、俺たちの現況かもしれない。石を積み上げる覚悟が日増しに弱まる。しかし、再び震災が訪れても、何者にも負けずに、どこにも逃げない職員たちと復興に立ち向かっている姿がありそうな気がする、と上原は思った。

賽の河原で、石を積み上げてから10日後、石綿管が破損して漏水した。さらに修理をすると、再び漏水が発生した。給水区域は全地区に広がったものの、漏水が収まる気配はなかった。

「まるで、もぐら叩きだよ」と職員たちが言う。そして、出てきた漏水は、修理というハンマーで一つひとつ叩くしかないと作業に取り組んだ。

4・11の震災で被災した大高調整池の内部整流壁

4月26日、津波で被害を受けた小浜地区への給水作業を開始した。しかし、通水したことで漏水が発生し、農道の法面が土砂崩れを起こした。地震で地中の給水管が損傷していたためだった。法面を復旧し、給水管も仮設しなければならなかった。

その一方で、震災後初めて水が出た住民が、「水出たぞ。風呂に入って気持ちよかった。あんたんちはどうだい」と喜びながら隣人に呼び掛けていた。その姿を見た職員は、作業を終え事務所に帰り、「ああいうの見ると、仕事やってて本当よかったって思ったよ」と感慨深く語った。

岩間、錦須賀に続き、震災発生から52日目の5月1日。津波で被災した小浜の水道本管からの給水が可能となった。そして、臨時の給水所も設置された。3月11日の震災以来、上原が最終目標としてきた姿がようやく完成した。

ときには無理解な住民の怒りと対峙し、ときには賛辞の声に涙しながら、1人でも多く、一日でも早く水が使えるよう、職員みんなが頑張ってきた。そして、職員の応援、他都市の援助、水道業者の懸命の復旧作業と、多くの助力を得てここまで辿り着けたと、上原は改めて思うのだった。

311水道部隊の軌跡 ⑧

市民の声がある限り

感謝と激励の電子メール

いわき市水道局 参事・給水課長 金成 恭一

（6月14日付1面から）

●感謝の言葉

中でも、多くの市民から寄せられた感謝と激励の電子メールには、大きな勇気をもらった。上原が届いたメールを壁に貼り付けると、「こういうメールをもらうと、元気が出るね」とそれを見た職員が嬉しそうに言った。

上原は、力をもらったそれらのメールを、整理して皆に配った。

「再度の断水、停電と重なり不安と不便さを覚悟していました。しかし、貴局のご尽力で給水され、入浴できました。ありがとうございます」

「今日、早くも水道が出ました。おそらく先月の震災から休む間もなく今回の復旧作業、本当にありがとうございます。たくさんの人が感謝しています」

「せっかく復旧できたのに、地震の馬鹿です。水が出たときの、住民の笑顔のために頑張ってください。世界一の水道部隊にエールを送ります」

「こんなに早く対応していただいて、とても感謝しています。水道復旧にご尽力していただいた方々に感謝します」

「余震により再び断水となり、落胆を乗り越えての復旧作業。本当にお疲れさまでした」

「再び断水となりましたが、皆さまが不眠不休で復旧に当たってくれることを思うと、心が痛みます。市民の一人として、皆さまを誇りに思います」

こうした市民の声がある限り、水道復旧に頑張れるなと上原は思うのだった。

●休暇

復旧作業が落ち着いた5月の連休の後半に、上原は、久しぶりの休暇を取った。初日は震災後、自宅の亀裂ができた壁紙や柱の化粧板を修理した。「これでも、勇樹がいたから、落ちて割れた皿やコップを拾って、本棚から落ちた本を片付けてもらったのよ」と真美が言った。震災以後、上原は家のことは妻に任せきりだった。「本当、俺は何にもできなかったから、勇樹がいてくれて助かったなあ。お世話さまでした」と上原は真美に感謝した。

翌日、上原と真美はドライブに出かけることにした。会津の桜を見たかったが、ラジオは会津周辺の渋滞を伝えていた。目的地を猪苗代にした。猪苗代湖周辺の桜を探していると、観音寺河畔の桜祭りに出会った。清流の河畔の約1キロにわたり桜の回廊ができ、近くには磐梯山が見えた。

その後、猪苗代ホテルのハーブガーデンに向かうと、バザーが開催されていた。疲れた上原を車に残して、真美はバザーに向かった。1時間ほど買い物をして車に戻った真美が、「いわき市から避難している人がバザーに出品してたのよ。その人からいい買い物をしてきたわ」と上原に語った。ラベンダー畑はまだ見頃の時期には早かった。2人はラベンダー味のソフトクリームを売店で買った。それはラベンダーの微かな香りがするさわやかな味だった。

猪苗代の観光パンフレットを見ながら、「他の桜も見たいね。どこにする」と真美が聞くと、「リゾートの近くに天鏡台があるね。こっちに行ってみようか」と2人はリゾートホテルの方向に向かった。途中、猪苗代氏の居城である亀ケ城公園の桜を見た。ここまで来ると磐梯山は目の前にある。ソメイヨシノは散り始めていたが、八重桜と磐梯山の取り合わせは絵になった。

道に迷い、ホテルにいた人に天鏡台の場所を聞くと、「私、ここの者でないんですよ。浪江町から避難して来たんですよ」と言いながら教えてくれた。

車の中で真美が、「去年は夜ノ森の桜を見た後で、浪江まで行って、B級グルメの浪江焼きそばを食べたよね。その近くで、請戸川の桜もきれいだったわね。あそこも避難地区でしょう」と言ってため息をついた。

震災から離れて気分転換しようとしたのだが、福島県全体が大きな意味で被災していることを、上原は改めて感じた。

震災は、多くの人たちの人生を激変させていた。上原は真美に、「そう言えば、偕楽園の夜梅祭りに行ったのは3月5日だから、震災の1週間前だったんだ。今にして思えば平穏無事だったな。あれから大変だったと言った。

あの日、上原と真美は屋台のラーメンや鮟鱇のどぶ汁に舌鼓を打ちながら、近くで打ち上げられる花火を眺めた。キャンドルやライトアップで紅・白の梅花、竹林が幻想的に映え、散策する観光客で賑わっていた。

「夜じゃ、せっかく満開の梅も見れないね」真美が残念がると、「失敗したね。でも、もうすぐ桜が見れるからいいじゃない」と上原は慰めた。だが、震災以来、いわきの桜を愛でる余裕は無かった。

家族も無事だった。猪苗代に来て、やっと桜も楽しめた。こんなに当たり前のことなのだが、上原は心穏やかな幸せを改めて感じていた。

＊

「大変だったね水道は」と市民の皆さまから感謝された水道復旧。そのディールを書き連ねることで、「世界一の水道部隊」と誇れる私たちがいたことを後世に残したいがため、この作品を書き上げた。

そして、身を削りながら勿来地区の水道復旧に尽力された事務所の同僚たち、応援をいただいた局・市職員の皆さま、休みなく復旧工事をしていただいた管工事協同組合の皆さま、市外から応援いただいた横浜、東京の皆さまも、温かいお味噌汁を作ってくれた友人Mさん、応援物資、応援メールで励ましていただいた皆さま、最後に、わが家を支え、食事など差し入れてくれた妻と子供たち―。

311から411まで、これら多くの方たちがいたからこそ、水道施設の復旧作業が完遂できた。

この作品を、これらの多くの皆さまに捧げながら感謝の意を表したい。

（おわり）